

房総の

文化財

VOL.51



ISSN 0919-0848
Boso no bunkazai

平成24年1月10日 財団法人 千葉県教育振興財団:

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811 (代) FAX 043-422-8850

http://www.echiba.org/bunkazai_top.html



縄文時代中期（5,000年前頃）の貯蔵穴や竪穴住居跡が密集してたくさん見つかりました。遺跡見学会では、多くの参加者が古代の息吹を感じていたようです。（柏市小山台遺跡）

contents

発掘調査速報

柏市小山台遺跡

遺物紹介コーナー

香取市吉原三王遺跡
袖ヶ浦市文脇遺跡

埋文・アラカルト

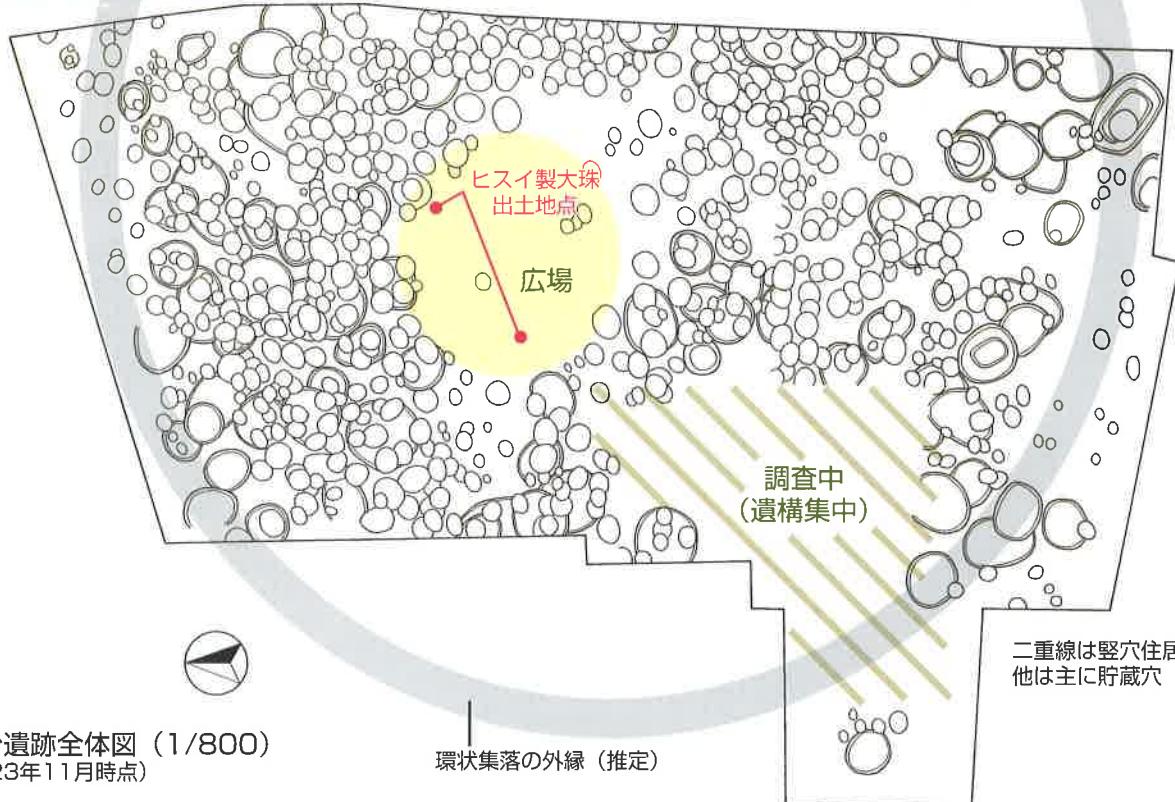
平成23年度出土遺物巡回展
平成23年度千葉県遺跡調査研究発表会

【発掘調査速報】

かんじょう

掘り出された環状集落!!

柏市小山台遺跡



柏市の北部で、つくばエクスプレスの柏たなか駅に近い小山台遺跡は、これまでに40地点以上の発掘調査が行われてきました。その中の第36次調査地点とその付近では、縄文時代中期の貯蔵穴群やそれを囲むように竪穴住居跡群がたくさん発見されています。住居跡などの分布は直径約150mにも及び、環状集落と呼ばれています。

環状集落の中心には住居などが建てられていない広場があり、その付近からはヒスイ製の装身具も見つかっています。集落の中央広場では、祈りやマツリなどが行われていたのかもしれません。



貯蔵穴から見つかった縄文土器



ムラの中央広場から見つかったヒスイ製の装身具

この装身具は、「大珠」と呼ばれるもので、広場をもつ環状集落や地域の拠点となる大規模な集落から発見される例が多く、集落内の有力な人物が所有していたようです。

旧石器時代

約12,000年前

縄文時代

小山台遺跡

BC(紀元前)

弥生

約2,300年前

香取市吉原三王遺跡

最新の県指定有形文化財

東関東自動車建設に伴って発掘調査が行われ、この遺跡の北西1.5kmほどに有名な香取神宮が位置しています。

発掘では、奈良・平安時代などの多くの竪穴住居跡とともに、住居群を区画するような溝なども見つかっており、古墳時代後期の6世紀後半頃から平安時代前半の11世紀頃まで営まれていたと考えられます。

今回県の有形文化財として指定されたのは、合計176点に及ぶ墨書き土器（文字などが書かれた土器）です。なかでも、1軒の竪穴住居跡から出土した墨書き土器には、長い文章が書かれたものがいくつかあり、その文字内容から、香取神宮に関係の深い「香取郡大槻（大）郷」の女性の交替に関わるようすを読み取ることができます。また、「吉原大畠」、「吉原仲家」などの墨書き土器は、香取神宮周辺の地名と思われ、地域の人々が集まって、この遺跡で交替に関する何らかのマツリを行っていた可能性が考えられます。

墨書き
土器

「香取郡大槻郷中臣人成女之替承」



左の長文墨書き土器は、香取郡大槻郷に住む「中臣人成女」という女性の交替に関する内容と判断できるでしょう。最後の「承」は、その内容を「承知」するという文字、または、土器の年代に相当する「承和」という年号を指しているかもしれません。



遺物紹介コーナー

袖ヶ浦市文脇遺跡

解明が進む大量の古銭

前号で紹介しました大量の古銭の資料調査が現在も行われており、内容が徐々に明らかとなっていました。

径65cmの土坑のなかに、径40~41cmの木製容器を置き、なかに銭をびっしり詰めた後、木製の蓋をしていました。容器は、曲げ物（檜や杉などの薄い板を円筒形に曲げ、桜や樺の皮ひもでとじ合わせ、これに底をつけたもの）で、きわめて薄い皮一枚が部分的に残っている状態でした。

取上げられた銭は、約3万枚（文）確認されました。径3~4mmのわらの紐で結ばれ、一縷97枚前後の「縷銭」が複数連ねて納められていました。

当時は、「省百法」という取り決めにより97枚前後（一縷）で百文として流通していました。

木製蓋の状況



収められた銭の状況



珍しい銭種



わら紐で結ばれた縷銭の状況



上段右の写真は大量の古銭の中から見つかった貴重な銭です。中国前漢の四銖半両や、隋の五銖などの古い銭、日本の皇朝十二銭のひとつである富壽神寶も、保存状態がきわめて良好でした。他には、高麗王朝・金王朝などの比較的発行数の少ない珍しい種類も含まれていました。

AD(紀元後)

吉原三王遺跡

文脇遺跡

時代

古代

中世

近世

近・現代

古墳時代

平安時代

鎌倉時代

江戸時代

明治

約1,700年前

710

1,192

1,333

1,573

昭和

飛鳥時代

奈良時代

1,603

1,868

平成

安土・桃山時代

1,603

大正



お知らせ
コーナー

埋文・アラカルト

平成23年度出土遺物巡回展

房総発掘ものがたり

「古墳に眠る石枕」をテーマに、今から約1,600前の古墳時代中頃の房総を代表する「石枕」を中心にご紹介する展覧会を7月から開催中です。

全国では、120例ほどの「石枕」がありますが、そのうちの約半数は千葉県内から発見されており、まさに石枕集中地域といえます。このような石枕も、古墳時代前期に西日本で展開する石枕を造り付けた石棺などをモデルとして独自に展開していったことが考えられています。

今回、5世紀の前半頃に始まり、6世紀の前半頃に姿を消すまでの約100年間、古墳の埋葬に使われた県内の石枕などを展示するとともに、分布の中心となる「香取海」周辺と、東京湾岸域の地域性などもご紹介します。



成田市猫作・栗山16号墳



千葉市上赤塚1号墳



熊本県玉名市院塚古墳の石棺と石枕

今後の展示会場・開催期間

千葉県立中央博物館 ◆ 12月24日(土)~平成24年2月26日(日)

平成23年度 千葉県遺跡調査 研究発表会

- 日時／平成24年1月21日(土) 午前10時30分～午後3時30分
- 会場／千葉県立中央博物館 講堂
- 交通案内／JR千葉駅から「大学病院」行きバスなどで「中央博物館」下車、徒歩7分

当日先着受付
定員200名

「石枕」が流行する、今から約1,600年前の古墳時代中頃に焦点をしづって、東国の様相や石枕の出現、その広がりなどについてご紹介いたします。

基調
講演

●滝沢 誠氏（静岡大学人文学部教授）
「古墳時代の東海と関東」

研究
報告

●田中 裕氏（茨城大学人文学部准教授）
「古墳時代中期における東関東の地域社会」

●根本 岳史氏（財団法人印旛郡市文化財センター）
「台方宮代遺跡(2) 1号墳と船形手黒1号墳
—印旛沼東岸の石枕を有する古墳の調査—」

遺跡
見学会の
ご案内

●白井 久美子（財団法人千葉県教育振興財団）
「石枕と葬送」

●小林 清隆（財団法人千葉県教育振興財団）
「房総の玉作遺跡」

- 平成24年2月 4日(土)：富津市西谷古墳
- 平成24年2月18日(土)：印西市東場遺跡

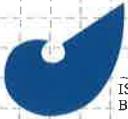
★詳細については当財団ホームページをご確認ください。



房総の

文化財

VOL. 52



ISSN 0919-0848
Bozo-no-bunkazai

平成25年3月25日 公益財団法人 千葉県教育振興財団

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811 (代) FAX 043-424-4811

http://www.echiba.org/bunkazai_top.html



市川市 道免き谷津遺跡の発掘のようす

contents

発掘調査速報

【外環道の遺跡】

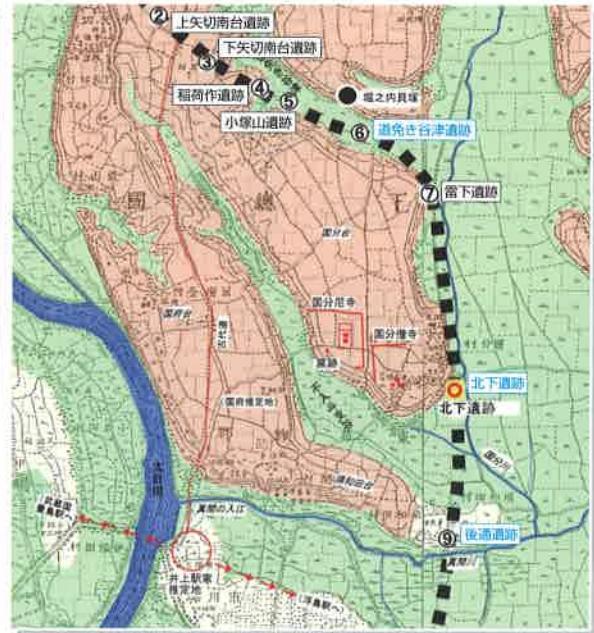
- 北下遺跡
- 後通遺跡
- 道免き谷津遺跡

外環道の遺跡

市川市

東京外かく環状道路（通称外環道）の建設に伴って調査された遺跡は、通称「国分台」と呼ばれる標高25mほどの平坦な台地の東側から北側を巡るように所在し、上矢切南台遺跡ほか2遺跡は台地上、他は低地上に立地しています。特に、低地部にある遺跡からは、台地上ではほとんど確認されない木製品がたくさん発見されており、当時の生活を考える上で貴重な情報を与えてくれます。

今回は、外環道の調査によって注目される遺構や遺物が見つかった北下遺跡・後通遺跡・道免き谷津遺跡の3遺跡を取り上げてその成果をご紹介します。



北下遺跡

北下遺跡は、平成14年度から発掘が始まり、下総国分寺の瓦を焼いた北下瓦窯や古代の川や道路の跡などが調査されています。川から発見されたマツリに関連する多くの遺物については、『房総の文化財』VOL49で紹介しました。ここでは、主に下総国分寺の創建期の瓦が作られていた瓦窯跡について紹介します。

左側の窯は、古墳時代以降用いられている登り窯で、焼成室内部が階段状となり、そこに瓦を並べて焼いています。右側は、床を平坦にした平窯で、当時の先進的な構造の窯です。しかし、火の通りを良くするための「牀」（ロストル）と呼ばれる凹凸がこの窯では確認されていないことから、牀が設けられる前の無牀の平窯ということになるでしょう。この時期の無牀の平窯は西日本に多く見られます。下総国分寺の創建にはこうした先進技術が採用されたようです。



▲登り窯



▲平窯



軒平瓦▲



後通遺跡・道免き谷津遺跡 BC(紀元前)

旧石器時代

約12,000年前

縄文時代

弥生

約2,300年前

後通遺跡



後通遺跡は、国分川と真間川にはさまれた東西500mほど、「須和田砂州」と呼ばれる砂州上にあります。現地表面から2mほど掘り下げる古墳時代から中世にかけて堆積した黒い粘土が現れ、その下、標高0mほどで砂だけの層になり、この間から砂の層にかけて縄文時代の遺物などが含まれています。砂の層の下には砂州が出来上がる以前、このあたりが海岸線に近かった頃に堆積した貝をたくさん含んだ層があります。

これまでの調査で、縄文時代から中世にかけての多くの遺構や遺物が発見されています。



▲発掘風景

調査地点が低地にあるため、水の浸入や土砂の崩れを防ぐために周囲を鉄の柵で囲んでいます。ぬかるみの中の発掘は一苦労です。



▼上から

▼櫛の全体

後通遺跡の標高0mの地点から、縄文時代の終わり頃（約2,800年前）の赤い漆で塗られた木製の櫛が発見されました。黒い粘土層の一番下のあたりです。現在残っている部分は、櫛の付け根の部分と歯の一部だけですが、大きさは、幅9.9cm、縦の長さ3.9cmで、現状で確認できる櫛の歯の数は12本です。

県内で櫛が見つかった例は少なく、市川市の道免き谷津遺跡、土器崎遺跡（木更津市）、高谷川遺跡（芝山町）に続き4例目の資料となりました。近くから時期がわかる土器などの出土はありませんでしたが、その特徴から、縄文時代終わり頃に作られたものと思われます。

▲エックス線による撮影
縦に黒っぽくみえるのが櫛の歯です。



▲井戸の掘り込みと上に置かれた土器



▲井戸枠の状況



▲井戸枠と内側の井筒



▲井筒

後通遺跡は、かつての下総国府推定域の東端に位置しています。この場所から、平安時代前期（約1,050年前）の井戸が発見されました。井戸からは、長短1組ずつの4枚の板を方形に組み合わせた井戸枠と、その内側から曲物を上下2つに組み合わせたヒノキ製の井筒も確認されました。井戸枠の板は、形状やホゾ穴などの特徴から、船と思われる部材を再利用した可能性があります。

井戸枠の外側は、杭状のスギ製の木材で囲まれているようで、周りの土が井戸内部に流れ込まないような工夫がされています。井戸の上には、赤く塗られた土師器の杯が置かれており、井戸を埋めたときの儀式に使われたようです。





道免き谷津遺跡

道免き谷津遺跡の調査では、縄文時代後期から晩期を中心とする遺構や遺物の包含層及び古墳時代前期の包含層などが発見されています。

発掘調査に際しては、周囲からの水の進入を防ぐために、鉄製の杭で囲むなどの対策が必要となります。

道免き谷津遺跡は谷底にあるため、水につかったままの状態で埋まっています。そのため空気から遮断され、台地上ではほとんど発見されることがない木製品が多く残っていました。

下の写真は、古墳時代前期（約1,700年前）の鍬の未製品と鋤です。当時の鍬は、1枚の板にいくつかの鍬先を連結して削り出し、それを一つずつ切り離して完成されるという作り方をしています。この例はその工程を示す良好な資料です。現在の長さは約74cm、幅約26cm、くびれた部分の幅約10cmで、このくびれ部で切り離すと2つの鍬先が出来上がります。

柄を取り付ける穴の場所

切り離し部



▲製作途中の鍬
くびれた部分で切り離した後に穴を開けて柄を取り付ければ完成です。



▲鋤の出土状況
鋤は、鍬とは異なり、1本の木材から柄と鋤先を作り出しています。

道免き谷津遺跡では、農具の他にもいくつかの木製品が見つかっています。

左の写真は、縄文時代後期（約4,000年前）の土器と一緒に出土した木の器に赤漆を塗った「木胎漆器」と呼ばれる珍しいものです。縄文時代前期以降、縄文土器に漆を塗ることはありますが、後期になると木の器に彩色する技術が発達します。日本の漆器のルーツと言えるでしょう。右下の写真は縄文時代晩期（約2,800年前）の耳飾りで、外径8cmと非常に大きなものです。耳たぶに穴を開け、次第に大きな耳飾りを装着して穴を大きくし、このように大きな耳飾りを付けていたのでしょう。大変な思いをしてまで飾っていた女性はどんな人だったのでしょうか。



▲木胎漆器

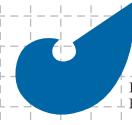


▲大型の耳飾り

房総の

文化財

VOL. 53



ISSN 0919-0848
Boso-no bunkazai

平成26年1月24日 公益財団法人 千葉県教育振興財団

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811 (代) FAX 043-424-4811

http://www.echiba.org/bunkazai_top.html



平成25年8月8日(木)に開催した市川市雷下遺跡見学会の様子です。

厳しい暑さにもかかわらず、多くの見学者がありました。



市川市雷下遺跡
の調査地点

オレンジ色のネットで
囲まれた部分が
調査の範囲です。

contents

発掘調査速報

- 市川市雷下遺跡
- 柏市小山台遺跡
- 酒々井町飯積原山遺跡

お知らせ

- 平成25年度物井地区展
- 平成25年度講演会

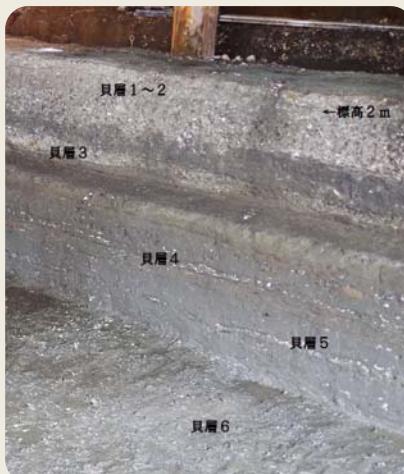


▲発掘調査のようす



▲人骨頭蓋骨（左：下顎、右：頭頂）

雷下遺跡では、現状で5地点から人骨が見つかっています。いずれも全身骨格のうちの一部分のみで、頭蓋骨、下顎骨、大腿骨が出土しています。縄文時代早期の人骨の調査例は、県内5例目です。



▲貝の堆積状況



▲貯蔵穴のようす



▲鹿角の出土状況



▲出土した獸骨類

北側では、貝層を掘り込んだ貯蔵穴が検出されています。直径40cm～50cm・深さ10cm～15cmの小型の貯蔵穴ですが、内部にはドングリ＝堅果類（ナラガシワ）がぎっしりと詰め込まれていました。

鹿角は、先端が平坦になっています。おそらく、何らかの製品を作るための部材として先端部が切り取られ、その残りが捨てられたと思われます。

貝塚からはたくさんの骨が出土しています。その多くが哺乳類で、その他に魚類や鳥類などもみられます。哺乳類の中ではニホンジカが圧倒的に多く、次いでイノシシ、小動物ではタヌキなども出土しており、当時の重要な食料源であったことがわかります。

柏市小山台遺跡

により、縄文時代中期（約4,000年～5,000年前）の大規模な環状集落が複数存在することが確認されています。今回は、平成25年度に調査を行った54次調査と55次調査をご紹介します。

54次調查



▲調査された遺構の全景



袋状土坑から見つかった縄文土器の出土
状況です。

袋状土坑とは、底が上面より広くなり、全体的にフラスコに近い形状となることから、フラスコ状ピットとも呼ばれています。用途としては、食料等の貯蔵に使われたのではないかと考えられています。



▲縄文時代中期の竪穴住居跡



▲縄文土器で囲まれた炉

中央の縄文土器が残っている部分が土器囲い炉です。地面を掘り込んだ穴の壁に沿って、縄文土器の口縁部や胴部を二重に巡らしています。

底面が火を受けて赤く変色していることから、調理などの炉として使われていたことが分かります。

55次調查



▲発掘調査のようす



▲調査された遺構の全景

55次の調査は、対象面積2,719m²で、調査地点が3か所に分かれています。最も広い面積の畠地部分の調査では、竪穴住居跡や袋状土坑、小竪穴などが密集した状態で発見されています。



縄文時代中期の竪穴住居跡です。中央に赤く見えるのが炉で、周囲に柱を立てた穴がみえます。

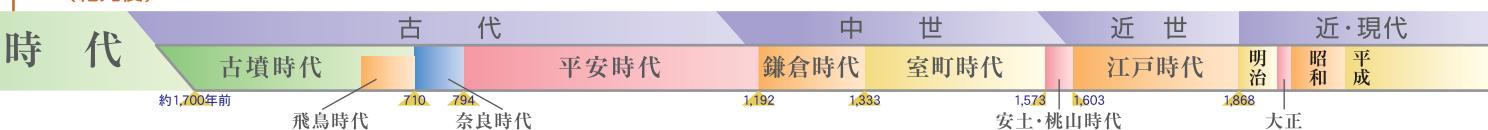


住居床面に設置された土器囲い炉です。手前の土器がない部分が焚（たき）口と思われます。



竪穴住居跡内から発見された縄文土器の出土状況です。深鉢や浅鉢などが1か所にまとまっていました。

AD (紀元後)



飯積原山遺跡は、印旛沼に注ぐ高崎川中流の標高37m前後の台地上にあり、酒々井プレミアム・アウトレットの東隣に位置しています。2万m²を超える広大な面積が調査対象となり、縄文時代中期（約4,000年～5,000年前）の数多くの竪穴住居跡や土坑などが密集した状態で発見されました。



▲2段に掘り込まれた長方形の住居跡



▲土器で囲まれた炉

縄文時代中期の竪穴住居跡は、径6mほどの円形あるいは橢円形の平面形をするものがほとんどですが、なかには長方形のものも數軒確認されています。



▲縄文時代の土偶（左：正面、右：上から）



▲発掘調査の風景

土坑から発見された土偶です。今までのところ、土偶はこの1点のみで、この遺跡では非常に珍しい資料です。

顔の表情や環状に作られた頭部など、土偶の中でもほとんど例のない特異なものです。

お知らせ

◆展示会「いにしえの世界ー四街道市物井地区の発掘ものがたりー」

昭和59年から発掘調査を開始した四街道市物井地区では、約3万2千年前の旧石器時代の大規模な石器群や約1,500～1,400年前の古墳から発見された四街道市内唯一の埴輪や金銅装の大刀など、貴重な文化財が見つかっています。

そこで、これまでの調査の成果を多くの皆様に御紹介したく、地元、四街道市内で展示会を開催することとなりました。実物資料や解説パネル等により分かりやすく展示いたします。

- 期 間・・・平成26年1月28日(火)～2月9日(日) 午前9時から午後6時まで 月曜日は休館 2月9日は午後5時まで
- 場 所・・・四街道市役所第二庁舎 市民ギャラリー 四街道市鹿渡2001-10 TEL 043-424-8934
- 見 学 料・・・無料

◆講演会「いにしえの世界ー四街道市物井地区の歴史をさぐるー」

- 日 時・・・平成26年2月1日（土）午後1時30分～4時まで（受付：午後1時から）

- 場 所・・・四街道市文化センター301・302室（3階）

- 入場料・・・無料

- 定 員・・・先着150名まで

- 講 演

①「最古のハイテク（石器製作）と旧石器人のライフスタイル」－旧石器時代－
(公財)千葉県教育振興財団／橋本 勝雄

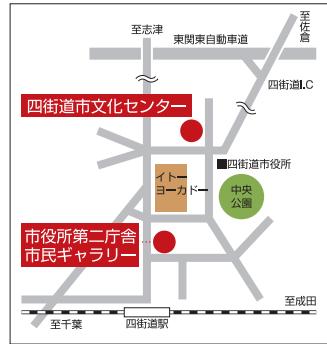
②「物井の古墳」
(公財)千葉県教育振興財団／白井 久美子

－古墳時代－

③「下総国千葉郡物井郷と小屋ノ内遺跡」
(公財)千葉県教育振興財団／糸川 道行

－奈良・平安時代－

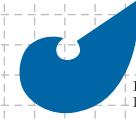
四街道市文化センター案内図



房総の

文化財

VOL. 54



ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai

平成27年3月27日 公益財団法人 千葉県教育振興財団

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811 (代) FAX 043-424-4811

http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

(公財)千葉県教育振興財団は、昭和49年（1974）年11月に設立され、平成26年に設立40周年を迎えました。今号は、その歴史の中で注目された遺跡を地域ごとにピックアップして紹介します。

▲丸木舟の取り上げ作業

▲市川市雷下遺跡丸木舟

丸木舟は、全長7.2mあり、幅は最大50cmほど、厚みは舟底部の端で約8cmです。舟全体が土圧によりほぼ平坦になっていますが、舷側部や両端部の立ち上がりがわずかに確認できます。

部材の一部で放射性炭素年代測定を行い、約7,500年前という結果となり、現在日本最古の丸木舟であることが分かりました。また、材質はムクノキと同定されました。

contents

速報 市川市雷下遺跡（表紙）

40年をふりかえって

- ◆市川市北下遺跡（最新）
- ◆四街道市池花南遺跡
- ◆市原市ちはら台遺跡群
- ◆山武市小川崎台遺跡
- ◆館山市長須賀条里制遺跡
- ◆木更津市笹子城跡

市川市北下遺跡

最新

北下遺跡は、下総国府推定域の東端に位置し、国史跡に

追加指定された下総国分寺創建瓦を焼成した瓦窯跡のほか梵鐘の鋳造遺構など注目される成果があがっています。また、旧河道からは多量の墨書土器や人形などの木製祭祀具を用いた古代の祭祀跡も見つかっています。今号では、平成26年7月～12月に調査された最新の成果を紹介します。



▲新たに見つかった鋳造遺構の台座部分



▲馬の下顎骨（下）と瓦（上）

池花南遺跡は、印旛沼に注ぐ手繰川最上流の台地上に位

置しています。昭和59年度から61年度にかけて発掘調査が行われ、特に約3万年前の第1文化層（IXc層）から発見された環状ブロックは全国的にも注目され、出土した石器740点が平成7年に県指定有形文化財（考古資料）に指定されました。

環状ブロックは、その後の池花南遺跡に隣接する物井地区の小屋ノ内遺跡や御山遺跡、出口・鐘塚遺跡でも見つかっており、旧石器時代はじめ頃の特徴的な遺跡が集中する地域として知られています。



◆第1文化層（約3万年前）の台形様石器

この文化層から出土した石器のうち、主体となる器種は28点の台形様石器で、主に珪質頁岩が使われています。

旧石器時代初め頃の特徴的な石器で、台形となるものが多いことから命名されています。柄を付けて刺突具または切削器に使用したと推定されていますが、いまだナゾの多い石器です。

台形様石器の母岩となった珪質頁岩などの分割・消費や供給などを検討した結果、5つの単位集団の集住が想定されています。

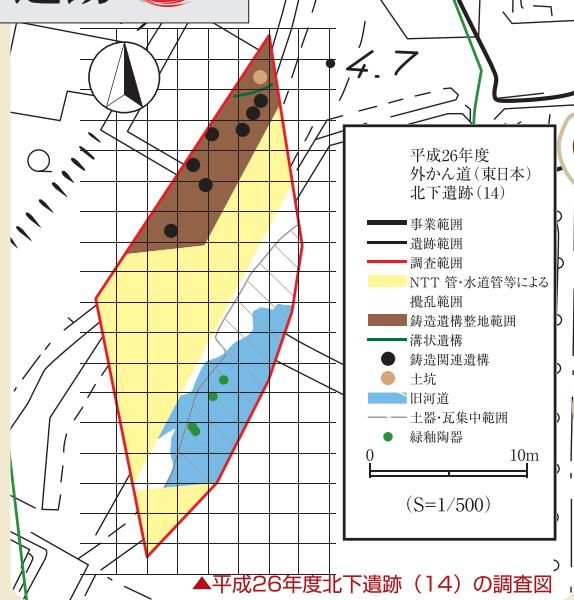
雷下遺跡

旧石器時代

約30,000年前

縄文時代

約12,000年前



「東院」と書かれた墨書土器で、下総国分僧寺の中心的な施設を意味していると思われます。

四街道市池花南遺跡



▲第1文化層環状ブロック群

東西30.5m、南北28.5mの規模で、中央の石器群プロックを囲むように17か所のプロックが環状に分布しています。



◆池花南遺跡
立川ローム層柱状図

関東ローム層は、主に古富士噴火による火山灰によって形成され、下から下末吉ローム層・武藏野ローム層・立川ローム層に大別されます。房総の旧石器時代の石器は、X層からⅢ層の立川ローム層中から発見されています。

池花南遺跡

BC (紀元前)

旧石器時代

約12,000年前

縄文時代

約2,300年前

ふりかえって



40
年を

市原市ちはら台遺跡群

ちはら台遺跡群は、
大規模な集落が調査

された草刈遺跡のほか10遺跡で構成された約87ヘクタール（東京ドーム18個分ほど）に及ぶ広大な面積を有しています。調査の結果、房総最古（3万5千年前頃）の石器を含む旧石器時代から中・近世にいたる多くの遺構や遺物が発見されました。特に、弥生時代から古墳時代を中心とした竪穴住居跡は総数4千軒、



1号鐘 ▲川焼台遺跡 2号鐘

◀草刈遺跡H区

古墳は170基ほどにも及んでいます。まさに千葉県最大の遺跡と言えましょう。

小銅鐸は北九州から関東にかけて50例ほどあり、そのうち9例が千葉県出土で、全国的にも小銅鐸の集中地域となっています。

ちはら台遺跡群では4例出土し、草刈遺跡H区小銅鐸は古墳時代前期の方墳の埋葬施設から発見されています。他の3例はいずれも竪穴住居跡からの出土で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて使用されたものと思われます。



▲草刈遺跡F区全景（部分）

有名な『魏志倭人伝』に、「特別なことをする時は骨を焼き、割れ目をみて吉凶を占う」とあるように、卑弥呼は占いの際にト骨を用いていたと考えられています。

草刈遺跡のト骨には、ニホンジカの肩甲骨と寛骨に棒状の道具の先端を焼いて骨に押し当てていた痕跡をはっきり見ることができます。竪穴住居内に廃棄された貝層中から発見され、この貝層からはウミガメの甲や刺突具状骨角器など占いに関係すると思われる遺物も伴っています。

◀草刈遺跡K区のト骨



千葉東金道路二期工事に先行して

平成5・6年度に調査されました。

発掘された古墳群は小川崎台古墳群として知られており、2基の前方後円墳と5基の円墳で構成されています。発掘された最大の古墳は、全長24.5mの帆立貝型前方後円墳で、墳丘中段に並べられた山武地域の特徴をもつ埴輪列が注目されました。

3号墳の築造年代は、出土した埴輪と土器から6世紀中頃と考えられています。



▲馬形・鳥形埴輪



▲人物埴輪

おがさきだい 山武市小川崎台遺跡

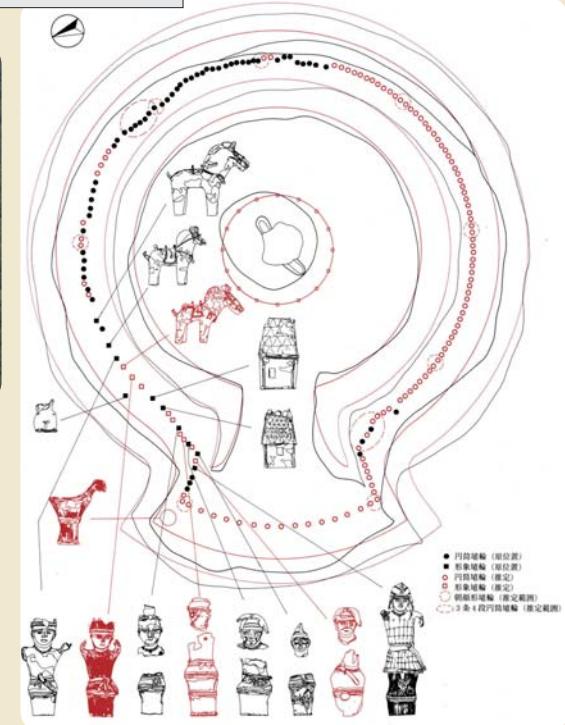
▼3号墳埴輪位置復元図



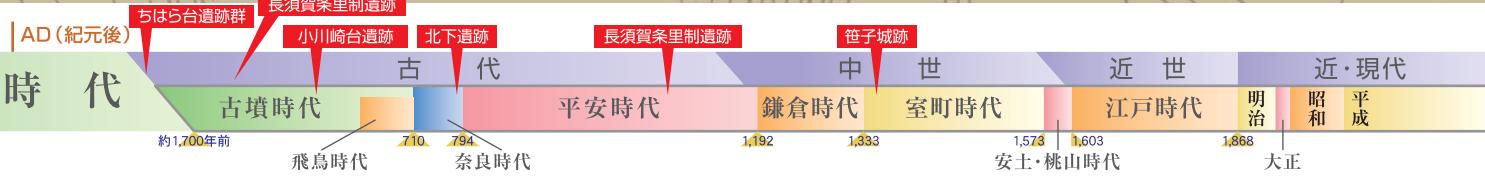
▲調査区全景

形象埴輪はくびれ部北側に集中して見つかっています。

内訳は、人物埴輪14体、鳥形埴輪7体、馬形埴輪3体、家形埴輪2体です。人物埴輪には、挂甲を着た武人埴輪や頭に壺を載せた女子、琴を弾く男子坐像などがあります。



墳丘中段のテラス部分を巡るように多くの埴輪が樹立されていました。円筒埴輪は総数170本程度と想定されます。



40

ふりかえって
年を発掘調査は、国道
410号バイパス建設

に先行して、平成5年～10年にかけて断続的に行われました。総延長1kmに及ぶ調査で、従来から知られていた古代の条里制に伴う畦畔のほかに、弥生時代の堰を伴う水路や古墳時代の水田・水路など生産を目的とした遺構が長期にわたって存在したことを示しています。また、古墳時代の水路には、水際での祭祀が伴っています。



古墳時代の小区画水田



平安時代の条里型水田（白線部分が畦畔）



古墳時代の水路と木桶



▲弥生時代の旧河道の堰

古墳時代の水路に付属した木桶が調査されました。西側の水田に水を引き込むための導水施設で、木桶本体は一本木を断面逆台形状に割り抜いたもので、扉板などの部材を再利用して補強されていました。



古墳時代の水田は、弥生時代を継承するような小区画（1面が1.0m×2.0mと2.5m×4.0mの2種類）の水田が広がっていました。

一方、平安時代の水田は、班田制に伴って整備された条里制が基本となっています。本遺跡から見つかった畦畔は、20m間隔であることから、半切型の地割りの1段歩の大きさと考えられます。

笹子城に関する直接的な文献はなく、詳細な部分は不明

ですが、江戸時代に編纂された『笹子落草子』によれば、城主は真里谷武田氏一族の武田信茂であったが、1543（天文12）年前後の一族の内紛をきっかけに、外部の北条氏や里見氏が加わって笹子城を舞台に合戦が行われ、落城したとされています。

調査によって出土した大量の陶磁器類からは、笹子城の存続年代は15世紀中頃から16世紀前半を主体とし、16世紀中頃に廃城となったことが想定されます。調査の成果と文献に記載された顛末がほぼ一致した例としても重要な調査となりました。

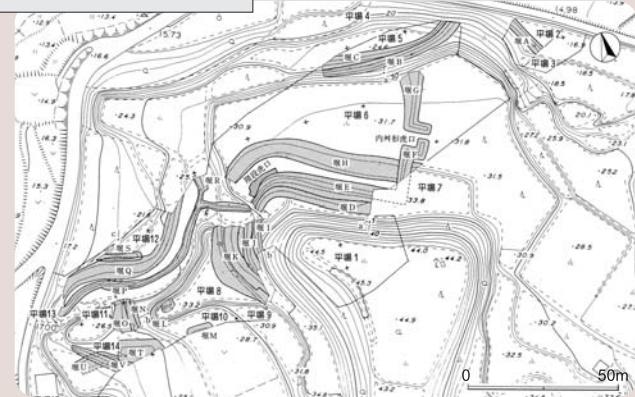


▲笹子城跡航空写真



▲調査区

木更津市 笹子城跡



▲発掘された笹子城跡の平場や空堀



和銅開珎

城域は南北850m、東西400mと県内でも有数の規模を誇っています。全体は7か所の郭で構成されていますが、発掘調査は最北部の郭の先端部、城域全体の1/30程度にとどまっています。

調査では22条の堀と15か所の平場が確認され、平場には多数の建物跡がありました。調査された堀はすべて埋め戻されていましたが、多量の五輪塔は最終時期の堀のみの出土であり、廃城にあたって城域内にあった墓地までも破壊された可能性があります。

▼水晶製五輪塔



高さ3.2cmの小型の水晶製五輪塔です。火輪部と水輪部の内側が割り抜かれています。蓋となる空・風輪部はありませんでした。

▼独鉢杵



密教の法具として使われた銅製の独鉢杵です。長さ15.2cmを測ります。

708（和銅元）年に日本で鋳造された最初の流通貨幣で、皇朝十二銭の一番目にあたります。

中世の北宋錢とともに見つかっており、城内で保有されていたものと思われます。北宋錢と皇朝十二銭が一緒になって発見されることは比較的よく見られます。

房総の

文化財

VOL. 55



ISSN 0919-0848
Boso_no_bunkazai

平成27年10月30日 公益財団法人 千葉県教育振興財団
〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2
TEL 043-422-8811 (代) FAX 043-424-4811
http://www.echiba.org/bunkazai_top.html



contents

発掘調査速報

- ◆四街道市古屋城跡
- ◆市川市道免き谷津遺跡
- ◆柏市小山台遺跡

お知らせ

平成27年度出土遺物公開事業

「館山道の遺跡展」～はるかなる西上総の歴史～

講演会

「はるかなる西上総の歴史」
～弥生時代から古墳時代へ～

四街道市古屋城跡

古屋城跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川左岸に位置します。昭和52年に主郭内の井戸跡が調査され、中から中国製の白磁碗、近くからは室町時代の和鏡「亀甲つなぎ散らし双鶴亀鈕鏡」も出土しており、市の指定文化財に指定されています。

今回の調査は第5次調査にあたり、城域の南東端の1,468m²を対象に、平成27年5月～7月に発掘調査が行われました。その結果、城郭関係の遺構としては、斜面部の台地整形の内部に腰郭と土塁が築かれ、さらに台地平坦部の直下には障子堀という堀が掘られていることがわかりました。

古屋城跡については、まだ本格的な整理作業に着手したばかりなので詳細は不明ですが、昭和52年に発見された中国産白磁などのように中世前期に遡る資料がある一方で、城の縄張り構造や出土した土器の様相から、16世紀代まで下ることが推測され、中世前期から戦国期にかけて比較的長期にわたって使用された城と考えられます。

一方、本城跡と谷を挟んで東に位置する北ノ作遺跡でも、曲輪や腰曲輪、土塁、障子堀など多くの遺構が調査されました。出土遺物からは、15世紀後半～16世紀初頭の年代が想定されますが、その構造から、16世紀後半には常駐しない砦として使われた可能性があります。15世紀には、臼井城の落城や直後の千葉宗家の奪回と本佐倉城の築造などがあり、この地域は鹿島川を挟んで千葉・原氏と臼井氏の対立が生じ、16世紀には戦国大名北条氏と房総南部の里見氏との対立の渦中にあったものと思われます。こうした事情が構造変化の背景にあったのでしょうか。

古屋城の城主は不明ですが、物井地域の領主層の本城となる可能性が高く、北ノ作遺跡は出城的な性格をもった城へと変容していったことが推測されます。

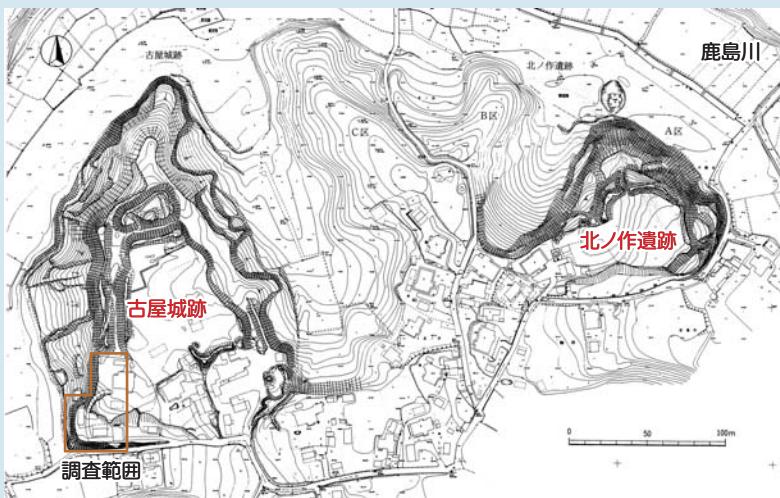


◆斜面部側の土塁と障子堀

障子堀とは、堀底に敵で区画された長方形状の深い掘り込みが設けられた防御性の高い堀を指しています。関東ローム層や粘土層が露出しているため水が溜まりやすく、堀の中の敵兵の自由を奪うことができます。



本城跡の東に位置する北ノ作遺跡でも同様の堀が見つかっていますが、戦国時代の関東地方の城に採用され、北条氏の城で発展したものと考えられています。



◆古屋城跡と北ノ作遺跡の航空写真

◆古屋城跡と北ノ作遺跡

市川市道免き谷津遺跡

道免き谷津遺跡は、市川市の北部、国指定史跡・堀之内貝塚のある台地の南に広がる谷津内に所在し、縄文時代後期～晩期を中心とする遺構や遺物が発見されています。

今回紹介する道免き谷津遺跡第1地点(12)は、平成26年7月～11月まで

調査が行われ、焼土集中地点や排水遺構、足場状遺構などとともに、縄文土器や石器のほか、多量の木製品が発見されました。

◀赤漆塗りの木製品(耳飾り)

この木製品は、全体に赤色の漆が施されています。円盤となる本体部分の表面には、中央に2つの同心円、外側に台形状と葉のような模様を組み合わせた彫刻が見られます。裏面は無文で、本体部分から円形の筒が2cmほどのびています。円盤の直径は6.9cm、全体の高さは2.6cmを測ります。

部分的に黒色の漆が観察されることから、漆は何層かに塗られ、最後に赤色の顔料を混ぜた漆が装飾用に塗られたようです。

あまり類例のない形態ですが、耳飾りのようなものとして使われたのではないでしょうか。



▲調査風景



▲足場状木材出土状況

こ やま だい 柏市小山台遺跡

小山台遺跡は、平成11年度から調査を開始し、これまで70次をこえる発掘調査が行われ、現在も継続しています。その結果、多量の遺物とともに大規模な縄文時代中期の集落が確認されています。特に、中央の広場を囲むように、竪穴住居や貯蔵穴・墓などが円形に配置される「環状集落」と呼ばれる、この時期特有の集落形態が複数存在することなど、この地域の拠点集落として注目されています。

小山台遺跡(58)は、平成26年5月～7月に763m²を対象に調査され、小面積ながら縄文時代の竪穴住居跡15軒、土坑46基などが密集して確認されました。環状集落の一部を構成するものと思われます。右の写真はその一部で、密集して竪穴住居が営まれていたようすがわかります。

中央に埋葬施設をもつ方形周溝状遺構▶ (小山台遺跡(70))

縄文時代の集落が圧倒的に多い中で、小山台遺跡(70)では、平安時代末～鎌倉時代にかけての方形周溝状遺構が確認されています。現在調査中ですが、1辺の長さが10mほどの大きさになります。中央部分には、長さ2.5m、幅1.2mの埋葬施設が設けられていました。



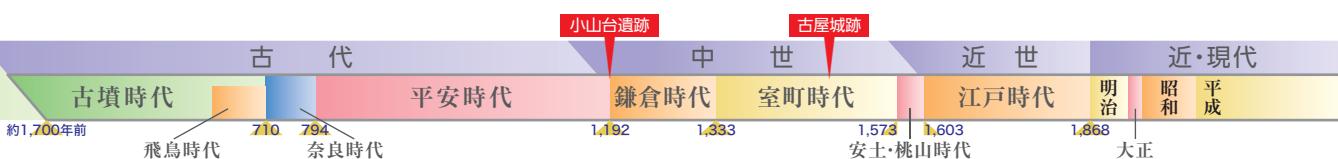
▲重なり合った縄文時代中期の竪穴住居跡
(小山台遺跡(58))



▲埋葬施設の遺物出土状況

底面などから見つかった土器から、平安時代末から鎌倉時代にかけて埋葬されたものと考えられます。

AD(紀元後)
時 代



平成27年度出土遺物公開事業 「館山道の遺跡展」講演会

「はるかなる西上総の歴史－弥生時代から古墳時代へ－」

のお知らせ

館山道(東関東自動車道千葉・富津線)の建設に伴って調査された遺跡の中から、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落の発見により注目された君津市鹿島台遺跡を中心に、講演・発表を行います。

弥生時代を中心とした日本列島各地の文化の多様性と相互の関係性を研究し、弥生時代研究の第一人者として知られています明治大学文学部長の石川日出志教授には、邪馬台国時代の房総についての特別講演をしていただきます。そのほか、西上総や君津地域において調査・研究の最前線で活躍しております研究者の講演や発表を交えて、弥生時代から古墳時代へと移っていく激動の時代を解説します。

日 時：平成27年11月7日(土)

10:30～15:30(受付・開場10:00～)

場 所：君津市生涯学習交流センター 2階

多目的ホール(君津市役所隣り)

君津市久保2丁目13番2号

定 員：先着250名(イスのみの使用)

申込み：事前申込みは不要です。

参加費：無料

主 催／(公財)千葉県教育振興財団

後 援／千葉県教育委員会・木更津市教育委員会

君津市教育委員会・富津市教育委員会

袖ヶ浦市教育委員会

今後の展示

平成27年度出土遺物公開事業 「館山道の遺跡展」

開催館と主な展示資料

木更津市郷土博物館金のすず

(10月24日㈯～12月23日水)

- 旧石器時代：房総最古級の環状ブロック
(袖ヶ浦市関畠遺跡局部磨製石斧・台形様石器)
- 縄文時代：環状盛土遺構の大集落(君津市三直貝塚縄文土器・土偶・石製品)
- 弥生時代：環濠集落と墓(君津市鹿島台遺跡弥生土器・玉類・土製品)
- 古墳時代：ムラから古墳へ(君津市鹿島台遺跡黔面埴輪・船が描かれた須恵器・鉄製品)
- 奈良・平安時代：条里制と生産(君津市三直中郷遺跡灰釉獸脚・土器・木製農耕具)
密集する火葬墓(君津市踊ヶ作遺跡骨蔵器)
- 中世：真里谷武田氏の居城と攻防：(木更津市 笹子城跡水晶製五輪塔・陶磁器、富津市根木田入口山脇砦跡陶磁器・石製品)

《参考展示》土器崎遺跡 縄文時代朱塗り竪櫛 丹過遺跡 畿内系土師器・瓦塔・土器



▲土器崎遺跡の竪櫛



▲笹子城跡の水晶製五輪塔ミニチュア

袖ヶ浦市郷土博物館

(平成28年1月5日㈬～2月14日㈰)

- 旧石器時代：房総最古級の環状ブロック(袖ヶ浦市関畠遺跡局部磨製石斧・台形様石器)、環状ブロック以降の石器群
(袖ヶ浦市台山遺跡ナイフ形石器・石刃・彫器)
- 古墳時代：前期のムラと方形周溝墓(袖ヶ浦市台山遺跡土器・玉類)
尾根上にそびえる古墳群(袖ヶ浦市椿古墳群銅鏡・銀象嵌鏡・土器)
- 中世：市のにぎわい(袖ヶ浦市山谷遺跡陶磁器・土器・石製品・錢貨)

《参考展示》袖ヶ浦市上宮田台遺跡 縄文土器・土偶・動物形土製品・土版・耳飾り



▲上宮田台遺跡の動物形土製品



椿古墳群の全景▶